文句言いに乗り込んできてくれたら、「人が育つチャンス」やと思う

園長　野中　泉

今回つけた、この長い長い題名は、実は、私の言葉ではなく、アトムの市原理事長の言葉です。私が、初めて市原と出会ったのは、今から１５年近く前のことなのですが、当時園長だった市原の講演を初めて聞いた私のメモのひとつが、この言葉です。当時も「すごいこと言うな」と思ったのですが、ご縁をいただいてアトムの園長になって５年。改めて、この言葉の意味を大事に思わずにはいられません。当時の私のメモはこんなふうに続きます。「大人同士が、遠慮なくもの言える関係がなくて、どうして子どもが自分の気持ちに正直に生きられるでしょう？自分と違う価値観にぶつかって、びっくりして悩んで、ワイワイ話して大人も育っていく。だからぶつかること怖がらないでって言いたいです」

ご存知のとおり、アトムには園長室がなく、事務室の窓をから私のデスクも丸見えなので、子どもたちだけでなく、お父さん、お母さんとも普段から顔を合わせ、おしゃべりする機会は他園の園長先生に比べたら、多い方ではないかと思っているのですが、この９月は、印象的なお母さんたちとのやりとりが続きました。

ひとりめは、感染症のお便り（おがーる）でも触れさせてもらいましたが、アデノウィルス流行時に、登園許可証が出ていても気になる様子の子どもをもう一日休ませるか休ませないかの判断をめぐる保育士とのやりとりで「？」と思ったモヤモヤをそのままに伝えに来てくれたお母さんとの話です。「苦情が言いたいんじゃないねん。どうしたらいいんか一緒に考えたいねん」と切り出してくれた彼女言葉にも「決定事項だけじゃなくて、今、話したみたいな保育士さんたちの迷いや葛藤も、保護者に投げてほしい」と言ってくれた言葉にも、今更ながらに、はっと気づかされることばかりでした。

ふたりめは、朝方の４時半に目覚めてしまって、５時半までプラレールで遊んでいた子どもの様子を書いた日報への担任からの返信が「体調が心配、寝る時間だよ。とちゃんと伝えて」と書かれたていたことに「寝てほしいに決まっているのに」とモヤモヤを感じたと伝えに来てくれたお母さん。下の子が生まれたばかりで ２ 時間おきの授乳でそもそも寝不足な自分の気持ちにも寄り添ってほしかったんだと思いますと正直に語ってくれた母に「想像力が足りない書き方だったね、ごめん。そんな愚痴、これからもいっぱい聞かせて」と担任。何より勇気を出して話に来てくれた理由として「せっかっく、アトムの親として送迎に毎日来て、顔を合わせる関係なのに、思っていることを言わないのは、もったいないことだと思った」と言ってくれたことに胸が熱くなりました。実は教師でもある彼女の「学校では、保護者とこんなふうに顔を合わせて話せる日常はないから」という言葉にも、アトムの日常の大事さを改めて実感したところです。

そして、三人目は、つい２・３日前のことです。保育士の自分の子どもへの対応。泣いている我が子がテラスに出されていたという状況に、どういうことだったの？と聞きに来てくれたお母さんです。テラスに出した保育士は、実は私でした。自分ではなくて、友だちのお母さんに「こんなところを目撃したよ」と聞かされて、心配になって、一度帰ったのに、やっぱり気になって帰ってきたお母さん。なかなか切り替えられず泣き止めずにいた彼をテラスに出して、「自分で泣き止めるから、泣き止んで戻ってきて」と言ったことや、１ 分もたたず泣き止んで、その後はおやつも食べて「できたね」と一緒に笑顔で終わりにしたことなどを話しました。「信頼していないとか、そういうんじゃないんです。でも、（友達に）そこだけ聞いたら心配になって、不安になって、モヤモヤして」ととても正直に不安な胸のうちを話しに来てくれたお母さん。間をおかずにすぐに意を決っして直接聞きに来てくれたからこそ、今、何を大事にしたいと思っているのか。子どもの姿を真ん中に担任も交えてたくさん話すことができたことも、本当に感謝だと思いました。

９月 17 日付の読売新聞ニュースに、また東京北区での「不適切保育」の記事が載りました。「寝付けない園児を廊下に出して面倒を見ないなど、複数の保育士による不適切な保育が行われていた」という無機質な記事に、本当に胸が締め付けられます。その園には、ここまでのことになる前に、アトムのように、乗り込んできてくれて直接ぶつかり、その理由を聞いてくれる優しい親たちはいなかったのでしょうか。考え込まずにはいられません。